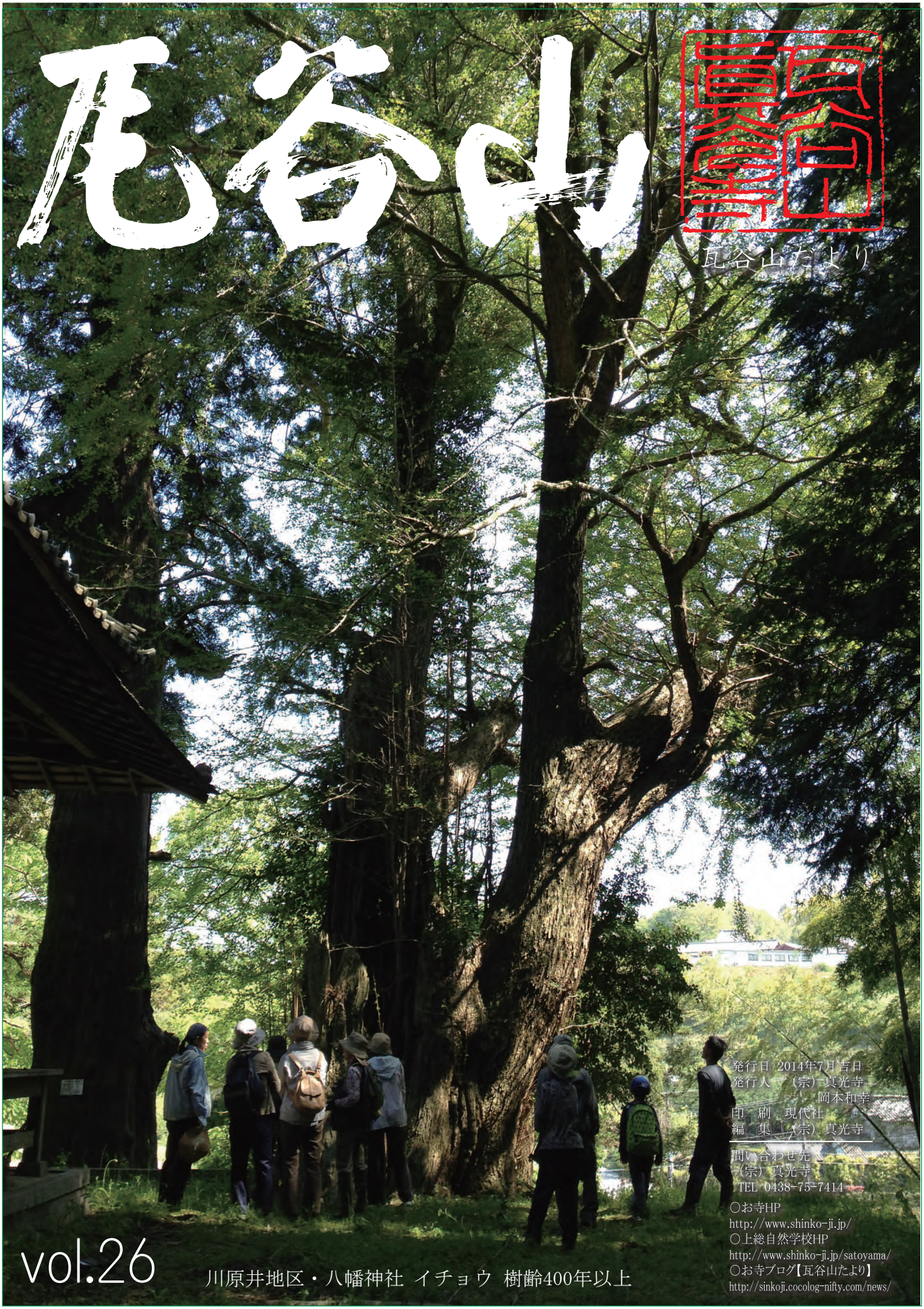
瓦谷山

瓦谷山たより



発行日 2014年7月吉日
発行人 （宗）真光寺
岡本和幸
印 刷 現代社
編 集 （宗）真光寺

問い合わせ先
（宗）真光寺
TEL 0438-75-7414
○お寺HP
http://www.shinko-ji.jp/
○上総自然学校HP
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/
○お寺ブログ【瓦谷山たより】
http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/

vol.26

川原井地区・八幡神社 イチョウ 樹齢400年以上

ごあいさつ

齢を重ねてくると、誰しも昔のことが無性に懐かしく思えるものです。最近、私もよく故郷のことを思い出します。私は、広島県三原市の米田山という五百メートル位の山のふもとにあるお寺に生まれました。お城のような石垣の上に建てられたお寺で、境内からは市内が一望できました。

私の遊び場は、お寺の境内や裏山でした。近所の子供たちもよくお寺に集まり、中学生から幼稚園児までが一緒に遊んでいました。境内ではビー玉遊びや、地面に通路を書いて飛び地を作り、鬼が通路から突き出す「肉弾」という遊びをしたのを覚えています。やがて「肉弾」はよりスリルを求め、一メートルほどの高さの鐘楼堂から下へ突き落とす遊びへと進化しました。あるいは「屋根むし」といって、本堂の屋根にボールを投げ、指名された子が落ちてくるボールをキャッチしないとボールをぶつけられるという荒っぽい遊びもやっていました。墓場は絶好の戦場で、銀玉鉄砲で銃撃戦をしたり、かくれんぼをしたり、墓石から墓石へと飛び歩いたりして遊びました。木登り石垣登りは当たり前、石垣に潜む大蛇を引っ張り出したり、お寺のそり立つ石垣をよじ登り、「ビービー」と呼んでいたさくらんぼを盗みに来る猛者もいました。

夏は特に楽しいことだらけで、夏になると井戸にいる赤面という大きな蟹を捕まえて遊んだり、セミはもちろん、カブトムシもクワガタムシが集まる木もみんな知っていましたから、毎日のように虫採りに出かけました。夕方には広島弁で「ドードー」というセミの幼虫を穴から引っ張り出すなど、遅くまで真っ黒になって遊びまわっていました。

高校生になるとよく米田山に登りました。この山は時々山火事になることで有名で、山の半分は草原になっていて、残りの半分、寺側の山は松林になっていました。小学生の時は頂上まで登るのは一苦労でしたが、高校生になると体力がつき、三十分ほどで頂上まで行けるようになりました。頂上に立つと天気次第では四国まで見通すことができます。瀬戸内海の水面に太陽が反射してキラキラ光る海と、多くの島々、行きかう船を見ていると、いやなこと、思い悩んでいることが飛んで行くように感じました。

楽しい思い出ばかりではなく、悪い思い出もたくさんあります。お寺で生まれたことがいやで仕方なかった上に、五歳で父が亡くなり母子家庭になってからは、自分たちが複雑な立場にあることをいつも感じていました。体が大きいわりには病弱で、しょっちゅう高熱を出して寝込んでいたことも引け目でしたし、中学からは「落ちこぼれ」になり、学校へ行くのも苦痛でした。そんな嫌だったことを今なお夢に見て、うなされることもしばしばあります。楽しい思い出と、悔しさや悲しさ、せつなさは、同時に私の中に存在し、それらの過去が今の私の心を形成しています。それでも懐かしく思うのは、いよいよ老境に入り始めたからかもしれません。

高校を卒業すると上京し、大都会新宿のど真ん中のお寺から大学へ通い、その後は御本山に上がりましたが、修行生活が身体にあったのか、爾来風邪ひとつひかない健康体となりました。そして数奇なご縁により千葉袖ヶ浦の地に居を定めてからは、故郷がいよいよ遠くなった感はありますが、今にして思えば瀬戸の穏やかな風情と山を巡る穏やかな風、山中の生き物の息遣い、米田山の頂上まで登ることができた達成感など、当時のすべてが私の力になっていたことを実感します。

子供の遊びにしても、昔に比べ、今は安全がはるかに重視されるようになりました。しかし危険な体験をすることなく、痛みを知らないまま大人になってしまって果たしていいのかどうか、疑問を禁じ得ません。安全を確保するため、あまりにも決まりごとが多くなってがんじがらめの社会に漂う閉塞感を政治が利用し、戦争に向かって進んでいるようにも感じられます。政治家は「子供たちを守るため」と言いますが、戦争が始まれば戦うのは子供たちなのです。

大人になれば自分の人生は自分で決めなければなりません。その責任もすべて自分にあります。過去をしっかりとらえ、自己を見つめ、他にやさしくできる人を社会全体で育てていきたいものです。

樹木葬墓地第三期の造成も終わり、正式に墓地としての許可をいただきました。また葬儀法事はもとより、上総自然学校の活動のためにも必要な書院の建設に向け、準備を進めています。夏の盆行事が始まります。子供たちも大勢連れて、ぜひお参りください。

合　掌

住職　岡本和幸

行事報告

開創四五〇年記念碑建立

真光寺開創記念事業（現在の伽藍の建立）の記念碑として、寺院名と本事業にご尽力賜りました檀家役員のお名前を刻んだ石塔を建立いたしました。

四月六日、花まつり法要に先んじて除幕式を行いました。石碑の材料は真鶴の本小松石を使用し、書は岡本方丈の友人「土井 伸」氏の揮毫です。ちなみに石柱部分は岡本方丈の身長と同じ高さにするいたずらがしてあります。

平成六年より一緒にお寺を作り上げてきた檀家の方々

石工の巧みな玉掛け

花まつり。梅花隊の優しい歌声でお祝いします。梅花隊募集中です！

七日法要・植樹祭

四月の七日法要、午後行事は植樹祭でした。この日だけは自身の区画に苗木（低木）を植えることができるので、大勢のご参加でした。今年の気候は3月中旬まで気温が低く、以降急激に上がったために、桜も多くの品種が一挙に開花し、絶好のお花見日和となりました。

吉野桜、山桜、枝垂れ桜、花ももが揃いました。開苑以来の好日となりました。

まだ若木が多い境内ですが、そろそろ花付きも良くなりました。来年はお花見も兼ねたお参りができることと期待しています。

位牌壇増設

これまで、東長寺からの頂きものを使用していました位牌壇ですが、縁の会会員の募集計画に従って増設いたしました。品物は輪島での制作で、とても良いものです。

美しく保つよう職員一同努力して参ります。

精密な水平調整がなされていて継ぎ目に位牌を置いても傾くことがありません。

紫陽花の参道造り

この四月からスタートした試みです。真光寺参道の急坂の両脇には紫陽花がありますが、年々補植して紫陽花寺として親しんでいただきたいと願っています。

その紫陽花の育成、と移植作業をお手伝いいただく企画ですが、初回にもかかわらず、七名のご参加がありました。この日は将来の挿し木の母体となる紫陽花七種類（羽衣の舞・美方八重など）を植えました。

体力、技術に自信のある方全くの初心者の方でも楽しんで作業できます。

聖典講読の会

毎月1回開催している聖典講読の会。住職による修証義の解説の後、精進料理をいただく会です。開催ごとに参加者は増え、四月は十四名の参加者がありました。

法話などのやさしい間口の広い話に比べて、専門的な講話と豪華な精進料理が好評です。どなたも是非ご参加ください。

真光寺日記

七年間にわたり、自然学校の顔として活躍いただき、舞台裏では様々な参加企画の提案と実行、また寺院経理という煩雑な仕事に専任いただいていた張初美さんが五月をもって退職されました。ご挨拶の文章をいただいていますのでご紹介いたします。

退職のご挨拶

張　初美

この度七年間務めた真光寺を退職することになりました。この場をお借りしてお世話になった方々にお別れのご挨拶をさせて頂きます。

私が初めて真光寺を訪れたのは八年程前になります。きっかけは当時真光寺に仕事で関わっていた友人でした。「田んぼをやっているお寺があるから今度おいでよ」と誘われ遊びに行ったのが事の始まりです。その時はまだ今の新しい立派な伽藍ではなく、築二〇〇年近く経つ趣のある本堂のみの形態でした。当時の真光寺に私は一年間、上総自然学校の参加者として田植え、草取り、稲刈り、収穫祭のイベントに参加していました。私は東京生まれの東京育ちで、田んぼと畑の区別もつかないような自然音痴でしたので、田んぼでの体験はとても新鮮でとても楽しいものでした。そんな折、お寺のブログ『瓦谷山たより』でなんと女性職員を募集する記事が掲載されていたのです。これは応募するしかない！と挙手したことを覚えています。応募したのは私一人でしたので(笑)、晴れて真光寺に就職となりましたのが経緯です。そして車の免許を取り、千葉に住まいを移し私の千葉ライフが始まりました。

勤め始めの頃は樹木葬墓苑の募集も始めたばかりの頃で、縁の会の会員様もさほど多くはありませんでした。自然学校の方も年間のイベント数も今ほど多くなく、参加者もほぼ身内といった感じでとてもアットホームな雰囲気の中で行われていました。もちろん真光寺で働く職員の数も今の半分程で、築二〇〇年近く経つ本堂の下、お寺で飼っている猫達と一緒に比較的のんびりと働いていた頃が懐かしく思い起こされます。

勤め始めてから一年経った頃、秋田から来ていた宮大工さんによって建設が進められていた現伽藍が完成しました。それまでの田舎の大きなおじいちゃんの家といった趣の旧本堂から、まるで映画のセットのような非現実的感溢れる新伽藍へ引っ越しました。新伽藍に引っ越してから、徐々に真光寺の樹木葬墓苑や自然学校などのプロジェクトが拡大されていき、縁の会の会員様の数も増え、七日法要も定着していきました。自然学校の方もイベント数・参加者数共に年々増えていき、シーズンでは毎週末イベントが行われ、参加者の方の幅も広がりました。そして職員の数も一人、また一人と増え、年々賑やかになっていく真光寺でした。

昨今では人々のお寺離れが世間で言われていますが、また真光寺は車がないと来られないような不便な環境にあります。その様な中、お参りや法事、法要、自然学校やお寺ヨガといったイベントでお寺を訪れる人は増え続け、土日はてんてこ舞いな忙しさまでになりました。私が勤め始めたころには想像もしなかった事です。方丈さんは常々「願いや祈りは人生の羅針盤であり、人生には羅針盤は必要」といった事を話されていました(私の記憶違いでなければ、)。どんどん賑わっていき、整備されていく真光寺を見ながら、その方丈さんの言葉を思い出し、まさにこの真光寺は方丈さんの願いの表れであるのだなと、感じ入っていました。

何よりこの様なお寺の発展に無くてはならないのは、ここ川原井で暮らしながらお寺を守り続けてこられた檀家さん方の存在です。自然学校も檀家さんの力添え無しでは成り得ない面もたくさんあります。また、お寺の事や畑や田んぼの事を何も知らなかった私を優しく迎えてくださり、たくさんの事を教えて頂きました。お酒もたくさん一緒に飲みました(笑)。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

また、縁の会の方でもすっかり顔なじみの方々もいらっしゃり、本来であればお会いしてご挨拶をしたかったのですが、この場を借りて別れのご挨拶をさせて頂きます。短い間でしたが、皆様とご縁が頂けた事に感謝しております。とても楽しい時間でした。

また、真光寺で皆様とお会いすることもあるかと思います。その時はまた「張さん！」といつもの様に声をかけて下されば嬉しいです。長いようで短い間でしたが、本当にありがとうございました。

お盆とお施食（施餓鬼）

施食会は、盂蘭盆会に付会されることが多く、同じものと捉えられる場合も少なくありませんが、その由来は異なります。

●施食…以前は施餓鬼と呼ばれていました。由来は「仏説救抜焔口陀羅尼経」（ぶっせつくばつえんくだらにきょう）というお経に説かれています。お釈迦様の弟子である阿難尊者が、森の中で静かに瞑想していると、焔口（えんく）という痩せ衰えた餓鬼があらわれ、「お前はあと三日で死ぬだろう。そして餓鬼世界におち、私のようなみにくい姿になるのだ」と予言しました。さらに焔口は「もし、救われたいのなら、餓鬼道で苦しむ一切の餓鬼たちに飲食を施しなさい。そうすれば、お前は救われる」と言います。すべての餓鬼に対する供養はどのようにすればよいのか、困った阿難尊者はお釈迦様にたずねます。阿難尊者の話を聞いたお釈迦さまは、救われる方法を指示します。「一器の食物を供え、この「加持飲食陀羅尼」（かじおんじきだらに）を唱えれば、供えた供物は無量の食物となり、すべての餓鬼たちに飲食を与えることができる」阿難尊者はお釈迦さまの教えのとおり供養をし、その結果八十八歳まで生きた、とされています。

●お盆…ある時お釈迦さまの弟子の目連尊者が修行で得た神通力で亡くなった母をさがすと、母は餓鬼道の世界にいて骨と皮ばかりにやせ衰えていました。大変な悲しみの中、目連尊者はお釈迦さまの処へおもむき、そのことを相談しました。お釈迦さまが示されるところによると、「七月十五日、多くの修行僧が集まってくる。できるかぎりの食物や衣服を用意して修行僧に供養のまことをささげるとよい。」とされました。その法により救われた母を見た目連尊者は毎年供養を続けることとしました。この行いが先祖供養としてのお盆の起こりであるといわれています。そうしたことと、もともとの古い慣習として初春と初秋の満月の日に祖先の霊が子孫のもとを訪れて交流する行事があったとされ、初春のものが正月の祭となり、初秋のものが盂蘭盆と習合して、行事として行なわれるようになったとされています。日本では八世紀ごろには夏に祖先供養を行うという風習が確立されたと考えられています。

と、いずれもお釈迦様の弟子である二人が餓鬼に苦しめられ、その救済のための法を起源とします。施食会はいつ行ってもよいものですが、通例的に盂蘭盆のシーズンに行われることが多く、真光寺でもそのように七月、八月と施食会を行います。お施食の供養は普段の供養より功徳の大きい行事とされています。

●自宅でのお盆の迎え方…お盆の時期は地方によって様々ですが、七月十五日前後、あるいは月遅れ盆（八月十五日）や旧盆（旧暦七月十五日）のいずれかに行われるのが一般的です。

●お盆の準備…お盆が近づいてきたら、まずお仏壇の掃除をしましょう。お仏壇はご本尊様とご先祖様をおまつりする大切な場所です。その際、香炉の灰もふるいにかけ、古い線香の残りなども丹念に取り除きましょう。また、お墓の清掃も行います。仏壇と別に盆棚（精霊棚）をまつる場合は、お位牌を盆棚にお移しします。盆棚の祀り方は地方によって異なります。

●迎え火…十三日は「迎え盆」といい、夕刻にご先祖様をお迎えします。まず菩提寺とお墓にお参りし、お花やお線香を供え、ご先祖様をご案内する気持ちで提灯に明かり（迎え火）を灯し、家路につきます。（それぞれの慣習に従ってお迎えしてください。）ご先祖様が家に着いたら迎え火を盆棚のお灯明に移し、全員でお参りします。お盆の期間中は、お団子やソウメン、ぼた餅などの変わり物と、「水の子」といわれる米と生茄子、胡瓜などをサイの目に切ったものを、ハスの葉などに盛って供えます。それぞれの地域、家庭によってお供え物も異なりますが、心をこめてご接待しましょう。

●送り火…十六日（地域によっては十五日）は、お迎えしたご先祖様をお見送りする「送り盆」の日です。この日、全国各地では送り火の意味で灯篭流しなどが行われます。京都の大文字なども、有名な送り火の一つです。

●ご先祖様が里帰りするお盆…この世に生きる私たちと大切な亡き人とが触れ合う大切な行事です。久しぶりに故郷に集まった家族や親族と共に、生死を越えた「つながり」の尊さを再確認しながら、楽しい語らいの時間を過ごしたいものです。ご自宅にお盆のご準備ができない場合にも是非ご家族でお寺にお参り、施食会法要にご参加ください。

（了）

上総自然学校（里山再生活動）

去年の十月中旬の大雨の影響により、大きな被害を受けた里山でしたが、手伝っていただいた方々の助けもあり、どうにか復旧作業が完了し、お米作りが行えるまでになりました。そして里山にも春が到来し、ついに田んぼイベントの季節がやってまいりました。冬は少なかった自然学校の参加者も、木々が鮮やかな緑色に色づいてゆくのと比例するかのように増えていきます。

今年度は『畝塗り』が約五十名、『田植え』がおよそ百五十名の方々にご参加いただきました。『畝塗り』ではテレビの取材がありました。放送された翌日からは、問い合わせや申し込みが殺到し、お寺も大わらわ……ということはありませんでした（笑）。

私の記憶がたしかであれば、今年度の『田植え』では上総自然学校史上最高の人数が一度に田植えを行いました。一通り作業を終えた後、まだ植え足りない大人は補植作業を、そうでない大人は木陰で日々の疲れを癒し、子供は全身泥だらけになって遊ぶ。そんないつもの光景でした。

夏が過ぎ、稲穂も垂れ下がり、実りの季節となりました頃、たくさんの方々のご参加をお待ちしております。（糸田）

赤米の田植の風景。収穫時期は９月頭と最も早いです。

紫米の田植の風景。収穫時期は１１月中旬と最も遅いです。。。

イベント日程

◆『赤米稲刈り』
・九月六日（土）　十五時半～十七時半

★『稲刈り』
・九月十三日（土）　十時～十六時
　十四日（日）　※各日日帰り

★『収穫祭』
・十月十一日（土）　十時～十六時
　十二日（日）　※各日日帰り

☆『サツマイモ掘り＆焼き芋』
・十月二十五日（土）　十四時～十六時

☆『干柿作り』
・十一月十五日（土）　十三時～十六時

□『紫米稲刈り＆ヨガ』
・十一月九日（日）　十三時～十七時

●『ごま豆腐づくり』
・十二月二日（火）　十三時～十五時

☆『しめ縄でお飾り作り』
・十二月十四日（日）　十三時～十五時

〈参加費〉

各イベント名の上にある記号です。

□大人 三千五百円/小学生 二千円
★大人 二千円/小学生 千円
●千二百円
◆五百円
☆八百円

〈申込み方法〉

参加される方の①氏名②住所③連絡先④生年月日⑤血液型⑥緊急連絡先（ご本人様が怪我をした時などの連絡先）を明記の上、メール・ファックス・電話でお申込みください。（連絡先は最後のページに記載があります）

谷津田で栽培されたとても甘いもち米（つきみもち）と里山で採れた新鮮なヨモギを使ったヨモギ餅。とても贅沢な味です。

畝から水が漏れてしまわないようにしっかりと塗り付けていきます。テレビの取材がありました。

杏子や松の植樹。ウサギやキョンなどによる新芽の食害を防ぐため竹で囲います。

赤米の田植の前にはサツマイモを植えました。数日後イノシシに少し掘り返されましたが、すぐに電気柵を張りました。秋の焼き芋が楽しみです。

畝塗りの前には、ここ数年恒例となっている檀家さんの竹林での筍堀りもありました。

ホットケーキミックスと豆腐で作った炭火パン。子供は待ちきれない様子です。

里山の生物

ホソミオツネントンボ

トンボ目（蜻蛉目）アオイトトンボ科ホソミオツネントンボ属。
♂全長３５-４２mm、♀全長３３-４１mm、本州・四国・九州まで広く分布。平地や山地の抽水植物が繁茂する池・沼・湿原の滞水などに生息。卵期間２～３週間程度、幼虫期間１か月半～３か月半程度。６～８月にかけて羽化し、成虫で越冬する。羽化した個体は、体色は枯れ枝のような茶色のまま越冬。越冬後♂は美しい青色に変化。♀は水色に変化するのと淡褐色のままのの２種類がいる。成虫になってからの寿命は１年間とトンボの中ではとても長い部類である。

昨年の大雨の影響なのか例年ほど種類が少なく思えた水路の生き物観察会。それでも沢山の生き物に出会うことができました。

お米まだまだ販売しています！

里山米（残り四百キロほど）

【品種】こしひかり
【農薬】いもち病予防の種子消毒。田植から収穫まで田んぼでは農薬は使用していません。
【肥料】有機肥料
【精米】一時間かけて低温で自家精米
【価格】玄米　五百五十円/kg
白米　六百円/kg

☆玄米の放射線測定結果（自主検査）
ヨウ素・セシウム134・セシウム137　検出せず
（検出限界値　１ベクレル/kg）

☆収益金は「上総自然学校」の里山再生活動費に充当します。

【ご注文方法】
①氏名 ②住所 ③電話番号 ④白米か玄米 ⑤数量（二キログラム以上）を明記し、ファックス・電話・メールにてお申込みください。（連絡先は最後のページに記載あり）

修証義に学ぶ

『修証義』に学ぶと題して、曹洞宗の代表的な経典である修証義を紐解きながら、生活に即したお話を連載しています。今回は「四摂法」についてです。四摂法とは人が迷いの岸から離れ、悟りの岸をめざして幸せな人生を送るための四つの方法のことです。四つの方法とは「布施」、「利行」、「同事」、「愛語」です。これは私たちの生活の中での指針です。

近年の自殺者の人数は、三万人前後という勢いだといいます。実際に死に至らない未遂者も相当数にのぼることでしょう。最近は青年たちがインターネット上で共に自殺する人を募集し、車中で集団自殺をはかるというショッキングなニュースも頻繁に見かけます。自ら命を絶つ人の増加とともに、殺人事件の報道も頻発し、特に目を覆いたくなるような、親殺し、子殺し、幼児殺しが目につきます。

私たちは気がついたらこの世に生をうけていました。思えば命があるということほど、私たちにとって当たり前に思えることはないかもしれません。しかし命ほど不思議でわからないものもありません。今日、経済が人の生きる上での指標になればなるほど、自らの欲望のままに生命をもてあそぼうという風潮が蔓延してきていることに、恐ろしさを感じます。私たちは命についてよく考え、自覚する必要があるように思えてなりません。

命とは、いったいどんなものでしょうか。私たちの命についてお釈迦様は、「自によらず他によらず縁による」とお示しです。自分で生まれてきたのではなく、親とか神が作ったというものでもない、縁という力によって生まれ、生きているのだといわれます。縁は接着剤のようなもので、この縁の結びつきが生きる原動力となります。私たちの命は、お父さんとお母さんが結びついた結果生まれたものです。生まれてからは、日々いただいた動物や植物の命が体の中で結びつき、生きる力になって少しづつ成長していきます。私たちの命は、そうやっていただいた小さな命のブロックが、少しつつピラミッドのように積み重なってできたものと言えるでしょう。

私たちの心も同じです。お父さんお母さんや先祖からもらった因子はあるとはいえ、生まれたときには心は純真無垢です。ところがさまざまな人と出会い、語らい、考えることによって、経験のブロックがピラミッドのように積み重ねられていきます。当然、その経験のピラミッドには、一つとして同じものはありません。そうやって培った経験が、それぞれの人間の判断基準となります。同じ言葉をかけられても、それぞれに違う受け取り方をしたり、同じものを見ても美しいと思う人もあれば醜いと思う人もいるのは、それぞれ過去の経験が違うからです。

もう少し視野を広げてみましょう。今生きている私たちのまわりには、いろいろな生き物が生きています。水があり空気があり緑がある中で、お互いが支えあい、循環してそれぞれの命を保っています。人間だって同じことです。空気がなければ、水がなければ、緑がなければ生きられませんし、動物や植物を食べることでしか命を維持することができません。また、血のつながりのあるなしにかかわらず、子供の時には大人に抱かれ、老いてからは子に抱かれて死んでいきます。人は決して一人で生きることはできません。お互いに支えあいながら生きています。私という命のまわりには無数の命があって、私の命をがっちりと支えてくれている、それが私たちの命のありようです。

私たちの命を考えるとき、もう一つ大切なことがあります。それは過去から現在、そして未来へとつながっていく縁の中で私たちは生きているということです。誰にも必ず父親と母親がいます。その父親と母親にもそれぞれ父親と母親がいます。そうして十代さかのぼると、私のこの命は千二十四人の先祖の命を経て伝えられたものということになります。二十代さかのぼれば百四万八千五百七十六人、三十代さかのぼれば十億七千三百七十四万千八百二十四人の先祖がこの命を伝え、ここからは一代さかのぼるごとに膨大な人の命が存在します。

そのように考えれば、人類誕生以来の命が自分まで伝わっているということになりますし、地球誕生以来、あるいはそれ以前からの命が代々私の命に伝えられていると言えるかもしれません。そのように、私たちは永遠の命をいただいて、今日ここに生きているのです。一代が三十年とすれば、三十代前とは約九百年ぐらい前の鎌倉時代になります。この時点での先祖の数が十億七千万人です。数字で見ただけではそんなものかなと思うだけかもしれませんが、当時は今よりずっと生きていくことが困難な時代でした。飢饉もあれば、戦乱も

あり、また疫病の流行もありました。十億という人たちが、自分は食べなくても子供に食べ物を与え、戦火や災害の中で子供を抱えて右往左往し、露のようにはかない命を細々とつなぎ、この命を伝えてきました。わずか数十年さかのぼった時代でさえ、多くの人たちが第二次世界大戦の空襲や戦後の混乱をくぐり抜け、命を育み、現代に伝えてくれたのです。

親はそれぞれに子供に夢を託します。すこしでも幸せになってもらいたい。豊かになってもらいたいという夢が代々伝えられ、今日この日本は平和で豊かな時を迎えています。とすれば、今の皆さんの考え方や行動も、必ず未来に影響します。皆さんが未来に絶望していたら、子供たちが未来に希望を持てるはずもありません。皆さんが自分さえ良ければいいという考えで生きれば、子供たちも同じように考えるのです。

先日、ある法事の席で何気なく「もしかしたら、故人はもう生まれ変わってこの世にいるかもしれませんよ」というお話をしたら、奇しくも故人のお孫さんがその日の朝に生まれたという報せがもたらされ、偶然とはいえ驚かされました。そのお孫さんが大きくなって、「お前が生まれたとき、お坊さんがこんな話をしたんだよ」とまわりの人から言われて、おじいさんがどんな人だったのか興味を持つかもしれません。故人はとても働き者でやさしい人でしたから、きっとお孫さんにもいい影響を与えることでしょう。私たちの命は尽きても、こうして残る人たちに何らかの影響を及ぼしていくのだなと思います。

私の父は五十歳で亡くなりました。私はその時五歳でした。父の亡くなった歳に近づくにつれ、それまで抱いていた父への恨みがましい気持ちがだんだんとなくなってきたことを感じます。そればかりか、いつのまにか父がやろうとして果たせなかったことを、自分もやっていることに気づきました。こんなことは、若いときには思いもしなかったことでした。

私たちの命は決められた時がくると終わります。その後のことはわかりません。人が生まれ変わることはありえないと口角泡を飛ばして論ずる人は、あの世は必ずある、来世は必ずあると強弁する人と同じくらい愚かしい人だと思います。それは決してわからないことなのです。論ずるに値しないことなのです。死後の世界のあるなしよりも、今ここで生きている人の人生が次の世代の指標として未来へと影響していく真実を捉えることが重要です。

今日「人は死んだらおしまい」という思想が主流であるように思います。その一方で、私らしい最期をということで、ご自分の葬式のやり方についてあれこれ考えをめぐらす方も多いようです。人が死んで無になってしまうのであれば、死んだ後のことなどどれくらい本気で考えられるのかとも思いますし、もし無になるのであれば、死んだ後などどうでもいいようにも思います。それよりも「あの世から見てるから、私のお葬式はみんなで頼むよ」という方が、残された人の心につながっていくというものではないでしょうか。昔から、先祖を大切にしろということが言われてきました。これは過去から伝えられた命や願いや夢を今日に伝え、また未来へとつなげていく使命を私たちが担っていることを教えているのではないかとも思います。何よりも来世があるという考え方自体、今を生きている人間が、次の世代に対する責任を負っているのだということを教えているように思えてなりません。

人の命は、平面的には素晴らしい縁に囲まれて生かされている命です。時間的には過去から未来へと連綿と継承されていく命なのです。ここのところをきちんと捕らえて生きていかないと、未来に多大な禍根を残す生き方をしてしまうのではないでしょうか。

さて、こうした私たちの命のありようをよく考えて、私たちがどう生きればいいのか考えて見たいと思います。道元禅師は私たちが命を生かしつくす生き方として、四摂法をお示しです。四摂法の第一は、「布施行」です。「布施」について『修証義』には、「治生産業基より布施」という言葉があります。これは私たちの人生活動はすべて布施行なのだという意味です。たとえばメーカーで働く人は、便利で安全な製品を生産して世の中に普及させることが布施行ですし、消費者はその製品を喜んで買うことでお金という布施をしています。そうした施しのやり取りが円滑に行われることで、私たちの人生は豊かなものになっていきます。私たちの命の真実を考えたときに布施行こそが理にかなった生き方だといわれるのです。

「布施行」をよりわかりやすく示したのが、「利行」ということです。『修証義』には、「利行は一法なりあまねく自他を刺するなり」という言葉があります。つまり世の中は他のために何かをする

ことで出来上がっているのだという教えです。

かつて読売新聞の社長を長く務めた正力松太郎氏はこの言葉に注目し、企業活動は利他の行でなくてはならないと考え、世の人々の便利のために新聞の最終面にラジオ欄を設けたそうです。今日では当たり前のことになっていますが、これは人々に大いに喜ばれて、読売新聞が国内最大の部数を誇る原動力となったと言われます。

他の命を積み重ねて生きている現実、またまわりに支えられて生かされている現実を明らめれば、利他の心で布施行を積み重ね、まわりの人たちに喜んでいただき、私自身もまた豊かになっていくことの大切さがおのずとわかるでしょう。「情けは人のためならず」と言いますが、結局、人のためになることが一番自分のためになっているのです。

「布施」、「利行」ということをより私に近づけて考えていくことを「同事」といいます。「同事」について『修証義』では、「同事というは不異なり、自にも不異なり、他にも不異なり」とあります。すなわち他人事ではなく、自分のこととして考えるということです。過去の人たちのことも自分ごと、未来の人たちのことも自分ごと、いわんや同じ時代を生きている人たちのことはなおさらに自分ごとです。「同事」はそうした生き方こそが大切なのだと教えているのだと思います。あるいは私たちは縁によってつながっている世界を生きているのですから、同事そのものが真理であり、それを心することが自分自身を大切にすることでもあるのだという意味です。

『修証義』第四章は、「おおよそ菩提心の行願にはかくのごとくの道理静かに思惟すべし」という言葉で締めくくられています。仏の心を起こし、有意義な時を生きたいと願い、それを実行するためには布施、利行、同事、といった道理を静かに考えてみなさいといわれるのです。ばたばたと過ぎていく日常の中で、少しでも静かな時間を持ち、私たちの命の現実をありのままにとらえ、行うべき道をしっかりと考え、過去から現在、未来へと連綿と続いていくこの命を、縁を大切にしながら、決して粗末にすることなく、夢と希望を持って生きて行きたいものです。

行　事　予　定

木に名札をつけるワークショップ

日時：7月17日（木）・9月18日（木）
　　11月10日（月）
　　午後1時半～午後3時半ごろ
　　（送迎あり。送迎午後に準じます。）
費用：無料

ご自分の区画や境内の植木に名札をつけませんか？
自分だけのステキな名札を飾ることできます。
植木の名前も合わせて勉強することで、毎日の散歩コースの植木の名前もわかるようになります。
材料はお寺で準備いたします。また専門的な加工は職員が行いますので、お参りのついででもお気軽にご参加ください。

名札をつけたい木の名前がわからない場合には、木の名前を調べます。

製作した人の名前も記入できます。

名札の製作。今回はコピー用紙の文字を転写する方法で作ります。（手書きや他の方法でもOK）

防腐処理をして完成。木に設置します。

仏 像 彫 刻 教 室　《どなたでも》

日時：毎月第1・第3水曜日
　　午後1時半～午後4時半
　（送迎あり。送迎午後に準じます。）
費用：3,500円　及び材料費

自分の手で仏像を彫るという、趣味としても、ライフワークとしても取り組める企画です。現在は3名の生徒さんと住職と職員も時間の許す限り一緒に参加しています。集中しますので、3時間があっという間に過ぎていきます。自分のペースで進めることができますので、毎回のご参加でなくても、都合のあうときだけ、指導が必要なときだけのご参加も可能です。初回、無料体験もあります。おすすめです！

行　事　予　定

紫陽花の参道造り　《どなたでも》

日時：7 月 23 日（水）ポット取り
　　午前 11 時～午後 3 時
（送迎あり。七日法要に準じます。）
※今年度は上記の回で終わりとなります。
費用：1,000 円　昼食付（精進カレー）

今年から始まりました紫陽花の参道造り。皆さまの手でお寺を作り上げる試みです。園芸の経験のない方でも全く問題ありません。職員が補助、用具類も全て貸出しがありますので、まずは体一つでご参加ください。

ヨ　ガ　教　室　《どなたでも》

日時：7 月 20 日（日）
　　8 月 17 日（日）
　　以降未定。月 1 回ペースですので、お問い合わせください。内容、時間は各回変わりますのでお問い合わせください。送迎あり。
費用：3,000 円程度（内容によって変わります。）

大好評のお寺でヨガです。70 歳近い男性も参加されていますので、まさに老若男女ご参加いただけます。難しく考えず、関心がある方はお気軽にご参加ください。

御 詠 歌 練 習　《どなたでも》

日時：7 月　8 日・22 日　8 月　5 日
　　9 月　9 日・30 日　10 月　14 日・28 日
　　11 月　11 日・25 日　12 月　9 日（忘年会）
　　午後 8 時より（10 月～4 月は午後 7 時半より）
費用：無料

お釈迦さま・両祖さまを讃え、ご先祖さまを敬うこころを唱えます。その歌は日本の風土と暮らしの中で生まれたメロディーです。やさしく穏やかな曲で、唱えやすく安らかなこころが生まれ、新たな感動がわいてきます。

梅花流詠讃歌は昭和２７年（１９５２）年に創立した、曹洞宗の御詠歌・和讃です。詠讃歌を学んでいくと自然に安らかな気持ちになり、正しい生き方を実感することができます。そして生きるための希望と、生きていくことへの感謝のこころで幸福になります。どうぞお寺の門を気軽にたたいてみましょう。

宿泊 真光寺囲碁の会　《どなたでも》

日時：10 月 14 日（火）・15 日（水）
　　12 月 4 日（木）・5 日（金）
　　午後 1 時半～翌日午後 2 時半
（送迎あり。送迎午後に準じます。）
費用：8,000 円　1 泊 3 食付

囲碁好きによる囲碁好きのための企画です。お寺の静寂な環境の中で囲碁を打ったり、散歩をしたりと贅沢な時間を過ごせます。住職も初心者ながら参加しますので、これから初めてみたいという方も是非ご参加ください。

とことん囲碁

お昼はそば打ち。味は参加者だけの秘密です。

宿泊 寺のある暮らし　《どなたでも》

日時：12 月 11 日（木）・12 日（金）
　　午前 11 時～翌日午後 1 時半
（送迎あり。七日法要に準じます。）
費用：7,000 円　1 泊 3 食付

宿坊及びプチ修行体験です。朝課、食事、坐禅、作務と禅寺の一日を負担なく、また自由に選べるようにアレンジしてあります。禅に関心がある方、日頃の生活のリフレッシュを考えている方、是非ご参加ください。

夕食、年末は忘年会の予定です。

精進料理と聖典講読の会　《どなたでも》

日時：7 月 29 日（火）・9 月 30 日（火）
　　10 月 27 日（月）・11 月 26 日（水）
　　12 月 18 日（木）
　　午前 11 時～午後 2 時半
（送迎あり。七日法要に準じます。）
費用：3,000 円　昼食付（精進料理）

住職による修証義解説の後、精進料理をいただきます。午後は写経や坐禅などをしてすごす人気の行事です。

行　事　予　定

七日法要　《縁の会会員》

日時：7月6日（日）　午前11時より授戒式・月例供養、午後は施食法要を行います。
8月2日（土）　午前11時より施食法要（午前の部）、午前1時半より施食法要（午後の部）
9月7日（日）　午前11時より授戒式・月例供養、午後は坐禅・写経・写仏を行います。
10月7日（火）　午前11時より授戒式・月例供養、午後は坐禅・写経・写仏を行います。
11月3日（月祝）縁の会総会　9月下旬頃に、お手紙にて詳細をご案内致します。
12月7日（日）　午前11時より授戒式・月例供養、午後は大掃除を行います。

※ ご出席の場合は必ずご予約下さい。午前のみ、午後のみの出席もできます。
※ 送迎あり。下記送迎のご案内参照。

※ 7月・8月の施食法要の詳細は「施食会のご案内」をご覧ください。
※ 11月縁の会総会の詳細は9月下旬頃に、お手紙にてご案内致します。

送迎のご案内【七日法要】

□電車の方
・下り　「JR袖ヶ浦駅」10時12分着
・上り　「JR袖ヶ浦駅」10時06分着
□アクアライン高速バスの方
【土日祝】
・品川発9時30分→袖ヶ浦BT10時17分着
・横浜発9時30分→袖ヶ浦BT10時09分着
・川崎発9時25分→袖ヶ浦BT10時14分着
・新宿発9時05分→袖ヶ浦BT10時08分着
【平　日】
・品川発9時25分→袖ヶ浦BT10時12分着
・横浜発9時30分→袖ヶ浦BT10時09分着
・川崎発9時15分→袖ヶ浦BT10時04分着
・新宿発9時05分→袖ヶ浦BT10時08分着

送迎のご案内【午後行事】

□電車の方
・下り　「JR袖ヶ浦駅」13時12分着
・上り　「JR袖ヶ浦駅」13時05分着
□アクアライン高速バスの方
【平　日】
・品川発12時15分→袖ヶ浦BT13時02分着
・横浜発12時30分→袖ヶ浦BT13時09分着
・川崎発12時15分→袖ヶ浦BT13時02分着
・新宿発11時40分→袖ヶ浦BT12時43分着

記載のない場合にはお問い合わせください。

縁の会秋彼岸法要　《縁の会会員》

日時　9月23日（火祝）　午前11時より
縁の会合同での彼岸法要を行います
※ご出席の場合は必ずご予約下さい。
※送迎あり。七日法要に準じます。

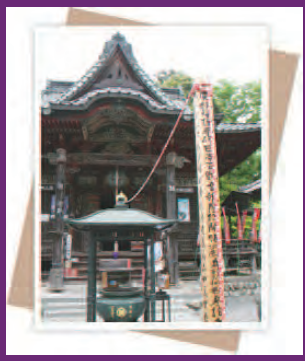
山門大施食会　《檀信徒向け》

日時　8月9日（土）　午後2時より

山門秋彼岸法要　《檀信徒向け》

日時　9月21日（火祝）　午後2時より
秋彼岸法要。法要後には余興を予定しています。

旅行　秩父三十四観音札所巡り



真光寺団参旅行、本年2回目となる秩父三十四観音巡りでございます。今回は21番札所から34番札所を参拝致します。1回目にご参加頂けなかった方も、12年に一度の総開帳ですので是非、この機会にお誘い合わせの上、ご参加お待ちしております。詳細は別紙案内をご参照ください。合掌

各種お申込み連絡先
真光寺　〒299-0201　千葉県袖ヶ浦市川原井634
TEL　0438-75-7414（代表）　TEL　0438-75-7365（縁の会事務局）　FAX　0438-75-7630
e-mail　ennokai@shinko-ji.jp（縁の会）　satoyama@shinko-ji.jp（上総自然学校）